

下肢の運動にて空間定位機能が向上した失語症の一例

○柏瀬 美帆¹⁾

1) おかたに病院

【はじめに】

失語症患者に対して軽い下肢運動を取り入れながら空間定位課題を実施した。その結果、空間定位課題の正確性が向上したため報告する。

【症例紹介】

70歳代の女性。左MCA領域の広範な脳梗塞を発症し、言語理解は短文レベルで比較的良好だが（SLTA短文の理解は6/10、WABのはい/いいえ検査は16/20）、単語の理解は不良（SLTA単語の理解0/10）。また、頻回な喚語困難や語性錯語があるものの、言語表出は短文レベルで可能。

【病態解釈】

本症例の特徴として、言語聴覚療法での机上課題にて左右・上下など空間指示語を伝達した時に戸惑いや誤反応を認めた。しかし、理学療法での歩行訓練中の行動観察の結果、比較的スムーズに空間指示語に従うことが可能であったため、下肢の運動によって空間定位機能が向上したと仮説を立て、言語聴覚療法に取り入れるアプローチをとった。

【介入・結果】

空間定位課題中（セラピストの音声指示に対して左右・上下を指差し/言語表出）に同時に足踏み動作を実施する条件（動作条件）と、静止したまま課題を実施する条件（静止条件）を比較した。その結果、動作条件における空間教示課題の正確性が静止条件と比べて37%向上した。さらに、空間指示語の理解の改善に伴い、空間指示語を使用した短文の指示に沿って絵カードを並べていく解読訓練の導入がスムーズになった。

【考察】

本症例における介入効果の詳細なメカニズムは不明であるが、下肢運動はM1・SMA等の運動に関連した脳ネットワークを活性化することが知られており（Luft et al., 2002）、身体中心座標の空間定位に関与すると考えられる頭頂葉領域（前田・村田, 2015）を巻き込んで活性化させた可能性がある。今後は、実際の足踏み動作ではなく、足踏み動作のイメージ想起でも空間定位の正確性が向上するかについて検討したい。

【説明と同意】

今回の発表に関して本人に口頭にて説明し、同意を得た。